

<ロータリー情報 10 分間⑨—2011~12 年度>

### 「ロータリー運動とは」—小堀憲助氏

2012.3.21 高萩 RC ロータリー情報・研修委員会

今回は、ロータリー思想・歴史の碩学である小堀憲助氏の著書：「ロータリー・クラブ—その理論と実態と批判—」、「ロータリー運動とは」、「純粋ロータリー理論から見たロータリーの経営哲学」より引用して、「ロータリー運動とは」を纏めました。

あちらこちらから引張っていますので、重複・前後する部分がありますがご容赦願います。  
なお、本稿の文責は高萩 RC ロータリー情報・研修委員会にあります。

<小堀憲助氏略歴> 大村北 RC（長崎市）名誉会員、神奈川県大磯市在住  
中央大学名誉教授（英米法）、元法学部長  
社会福祉法人ホニミスク会理事長  
「千種会」主宰（S46 年 Japan Sheldon Society）

全国に 16 支部——ロータリー理論研究会

著書：ロータリー発生史、ロータリーの原点、ロータリー運動とは、ロータリー・クラブ——その理論と実態と批判——、ロータリーの初心をたずねて、純粋ロータリー理論から見たロータリーの経営哲学、ロータリー哲学（アーサー・シェルドン著—小堀憲助訳）、ロータリー通解（ガイ・ガンデカー著—小堀憲助訳）等々

#### （1）ロータリーの発展

ロータリーは未熟な実体で生まれ、短期間に実に多角的な発展を遂げた。発展の原動力は、会員の積極性にある。その積極性を生ぜしめる原因は不明であるが、会員のクラブに対する認識と、これを進んで発展させようとする意欲とによって、多角的に進められ複雑な形で一進一退しながら発展を重ねてきた。

①原始ロータリー論——1905 年 ロータリーの中心概念は「相互扶助」

- \* 同業者排除
- \* 職業上の助け合い
- \* 異業者間の発想の交換が利益をもたらす

これらに対する批判——会員は一握りの人々であり、会員だけの相互扶助で利益を上げるのはエゴイズムである

1907 年 ポール・ハリスは「我ら少数の職業人の親睦のエネルギーをあげて、世のため、人のために放流しよう」と宣言し、ロータリーの方向を転換。

- ②ロータリー思想の発展——優秀な会員による「ロータリー哲学の探求」が絶えず行われていること。ロータリーは単なる社交クラブでなく、ロータリー哲学を根底に置くクラブである。
- ③会員の相互扶助——会員は正直・勤勉を前提として、顧客を含めて社会人に対する友愛を根本として企業経営を行い、商業道德の水準をあげることに専念した。ロータリー運動は自己

の発展を目的とする実践活動であり、その実践活動の指導原理として、犠牲・献身・名誉・誠意・愛・勤勉・他人に対する思いやりと尊重といったような平凡な原則を心の中に温存しようとするものである。

- ④一般奉仕概念の出現——シェルドンが 1908 年入会し、ロータリーの本質を一般概念で纏めることに成功し、一つの標語（He profits most who serves best）を発表し、ロータリーの哲学をその生来の弁舌力に物を言わせ世に提唱し、一般大衆を魅了した。

シェルドンが唱えた標語に対し、フランク・コリンズの「Service, not self」も 1911 年にロータリーに持ち込まれ、後に「Service above self」に変わったが、ロータリーのもう一つの標語となった。

さらに、1916 年のガイ・ガンデカーによる「A Talking Knowledge of Rotary」の出版により、それまでのロータリー思想が集大成され、広くロータリアンに読まれ、ロータリー運動の理論を普及させた。

## （2）奉仕の概念の誕生と「利己と利他との調和論」

1908 年 フレデリック・A・シェルドン入会

ロータリー運動に対社会的な目的「奉仕」と言う文化概念を結びつけ、ミシガン大学経営学の理論「奉仕の哲学」をロータリーに持ち込んだ。

<ミシガン大学経営学が形成した概念>

- \* 商人は利潤なくして、自己の事業を成り立たせることはできない
- \* 利潤獲得に名を借り、儲けのためなら手段を選ばないなら、社会は醜いものになる
- \* 「利己と利他との調和」こそ、商人と顧客との関係を規律すべき偉大な原則である
- \* この時商人も利益を得て、物心両面の幸せを得るが、顧客も商人との取引によって物心両面の幸せを得ることが出来る

これを、「奉仕」＝「利己と利他とを調和せしむべき心の場」と呼んだ

<シェルドンの考え方>

- ①「利己と利他との調和」＝「奉仕」
- ②この時のみ、同時に私的利潤の獲得が対社会的貢献と合致
- ③商業は金銭獲得の即物性の根底に文化性を取得

↓

この考え方に基づき自己の企業を管理する場合にのみ、自己の企業の発展と地域社会の開発を調和させることが出来、良質な利潤に支えられ、地域社会から尊敬と信頼を受けられる。

シェルドンが唱えた一般概念とは、『ロータリアンのクラブ親睦に起因する行動が他人に対する思いやりに連なる商行為にあり、この思いやりの精神は他人に対して「奉仕」することであり、それがロータリーの根底にある「service」である』

シェルドンもロータリーの本質は精神的な奉仕からくる満足感にあることは知っていたが、次の二つの点から標語は物質的な表現となった。

一つは、当時のロータリー運動の中心は「職業奉仕」であること、つまり会員は職業上の諸問題と職業倫理の向上に関心があったからであり、二つ目は、会員の大多数が実業家であって、企業という厳しい場で儲けという主要な目的を達成するために悪戦苦闘しており、これらの実業家の心に誇りを失わない表現でロータリーの哲学を示すことが適切であると考え、「He profits most who serves best」と説いた。

シェルドンはこの考え方を、ポール・ハリスが提唱している「我ら少数の職業人の親睦のエネルギーをあげて世のため、人のために」という発想の原理的基盤に置くべきと考え、ポールを説得し感動させた。これ以降 1920 年頃まで互いに協力して、ロータリー運動の原理的基盤の確立に努力を重ねた。

純理論的に見れば、RCの親睦こそ「利己と利他との調和」＝「奉仕」の会得を可能ならしめる場として捉えられるべきである。この時に、シカゴRCの例会での親睦が単なる感覚的な次元にとどまらず、精神的なものへと深まっていった。

シェルドンは、この原理実現のためにRCの制度そのものを手直し、職業分類学の力を借り職業分類表を作成し、各職種につき「利己と利他との調和」＝「奉仕」の会得の志を持った職業人を一人だけ会員とするのがロータリーのルールとし、これにより会員は職業体験だけが異なることになり、この異なった職業的発想が例会で交換されれば、本当の「利己と利他との調和」＝「奉仕」の精神的世界の体現に到達できると考えた。

RCが今日のような人類文化史上に確固たる社会制度としての地位を築いたのは、実にこの時であった。RCは同業者排除を唯一の基礎とする感覚的親睦団体から、地域社会の良質な職業人の横断的把握を基礎とする精神的親睦団体になり、少数の良質な職業人がその例会出席を通じて自己研鑽を重ね、それがやがて「利己と利他との調和」＝「奉仕」と言う状態に到達することを目標とするようになった。

会員の親睦を出会いの場とする「奉仕の心」に向けての努力が、企業管理の体質改善になって現れ、自己の私的利潤獲得の方法を改善すると同時に、業界において提示されることを通じて業界浄化の先例となり、RC活動の結果及び各ロータリアンの努力によって、商業主義そのものの中に潜む欠点に改善のメスを入れることとなった。

このような意味合いにおいて、He profits most who serves best. のモットーがあるのである。

### (3) その他の原理の提唱——「思考と実践との調和論」について

上記のシェルドンの考え方は、その崇高性と論理の整合性と後世に対する指導力の強さから卓抜したものであり、これを理解することなしには、ロータリー運動の独自性を示すものであると主張される「職業奉仕」の概念を永久に理解することは出来ないのですが、シェルドンの立場だけが、ロータリーの本質を理解する唯一の立場でなかったということです。

先ず第1に素朴で善意のロータリアンは、難しい理論などよりは、**善意や思い遣りに基づく他者に対する暖かい行動**の方が、はるかに「世のため、人のため」になると考えていました。

第2の立場は、利己と利他とが調和する間は良いが、もし仮に極限状況にあって一つを選択し

なければならない時に、そのいずれを選択すべきかを問い、ロータリアンたる者、すべからく、迷わず**利他を選択**すべきであると説く指導者もおりました。

これは、1911年のミネアポリスRCのフランク・コリンズの提唱した立場であり、**Service, not self** です。この立場に賛同した指導者は多く、1923年頃までの連合会の会長たちは大体この立場で、その中でも、1913年の会長のラッセル・グライナーは「1915年の全職業人を対象としたロータリー職業倫理訓」の提案者でもありました。

また、「ロータリー通解」——それまでのロータリー思想を集大成し、ロータリーの初歩的理解・教育のために作成されたもの——の著者であり、1915年連合会会長のガイ・ガンデカーもこの立場であります。

#### <ガイ・ガンデカーの考え方>

- ①精神性——親睦の実質的内容は「自己反省」と「自己改善」に連なる。クラブ親睦（奉仕の心と呼ばれる）を原因として、その対社会的効果を「奉仕の心の応用」、つまり「奉仕の実践」となるもので、この実践には千差万別な社会改良活動が含まれる。
- ②個人主義中心——奉仕の実践は、あくまでロータリアン個人の倫理活動であり、その相手方が主体的に受け入れるということをその効果としている。
- ③社会的連帯性——「ロータリーの親睦」はクラブの社交活動を通じて「自己研鑽」の効果をあげるだけでなく、ロータリアン各自がその社交友愛的態度を通じて地域社会の核となり、その影響力を地域社会生活万能に及ぼすことになる。

さらに、第3の立場として、「理論または原理と実践との調和を大切にすべき」とするもので、1914年の会長フランク・マルホランドであり、彼は、ロータリーの本質論についてはシェルドンの実質倫理主義、「利己と利他との調和」＝「奉仕」の立場でしたが、シェルドン一派の人たちが地域社会の弱者救済に比較的冷淡であったことや、高度な理論に酔いしれ行動に移すことがなござりになっているとして批判的でした。彼は、一職種一会員制に基づく使命感から、例会では人格形成に励み、地域社会では例会で体得した心をもって実践に励むという思考形式を一步進めて、むしろ特定の実践を基準にして、その原因をなす自己の境地の正当性を検証すべきであると唱え、種々雑多な弱者救済に励んでいた多くのロータリアンを応援しました。

当時、全米に共通の福祉課題として社会一般の関心を集めていた、「身体障害者の社会復帰運動」にロータリーは関心を向けつつある時期であり、この運動の一翼を担っていたいくつかのRCとロータリアンは社会の称賛を受け、ロータリー運動の実践効果と信じて疑いませんでした。

シェルドン派の考え方と第3の立場の「思考と実践の調和」を唱える人々との論争は激しくなりましたが、その決着は1923年まで持ち越されました。

#### (4) 問題の体系的かつ最終的決着——「奉仕の実践に関する決議第34号」

「決議第34号」は、ロータリー命題の理論的集大成である。

起草者は、ナッシュビルRCのウィリアム・メイニア Jr とシカゴRC会長のウィリアム・ウエストバーグである

- ①ロータリーは行動哲学であるという点を基本にして、体系化がはかられている。決議第34号の4の前段で、原理と実践との二つの概念の調和の立場から本質に迫ろうとしている。

- ②行動哲学の立場から、管理する実体はロータリアン各人である。
- ③RCの直接目的は、ロータリアンにロータリーの原理を修得する場を提供することである。
- ④奉仕の実践は例会を離れた瞬間から自分の立場で行う。
- ⑤ロータリー運動にあつては、ロータリアン個人の奉仕の実践が対社会的行動になる。
- ⑥RCは各会員に対する教育的機能であり教育活動である。
- ⑦社会活動の根底は個人であり、そのリーダーシップをロータリー運動の本願とすべき。
- ⑧RCの役割とRIの役割について
- ⑨ロータリーの哲学は人生哲学であり、Service above self と He profits most who serves best.

## (5) ロータリー運動の特質

ロータリーは20世紀社会の商人文化が作り上げた最も優れた思想である。ロータリーの運動は親睦活動に心の改善と言う高次の目的を加えたものであり、その特質は次の3項目である。

- ①個人性——ロータリー運動は、個人的活動を主体とする運動です。
- ②創造性——企業の管理の改善のみにとどまるものではなく、状況に応じて新しい実践的行動になってあらわれなければなりません。
- ③普遍性——ロータリーの思想は、アメリカ国民に固有のものではない。

## (6) ロータリーに対する世評（一般の人たちがロータリーをどう見ているか）

- ①ロータリーは「偉い人達の集まり」だ。（一般の人よりは上流階級の人たちの集まりだという）

当初、東京クラブや大阪クラブなどはその会員が極めて少数の経済的・社会的指導者の集りであったこと、その後も一業種一会員制度から地域の業界の指導的立場の人が会員になってきたことからこのように言われてきた。

しかし、戦後全国各地にRCが出来上がった時には、いわゆる「名士」のレッテル欲しさの者が皆無とは言えないが、ロータリアンが「名士」とされるのは全世界のロータリアンが半世紀以上にわたり奉仕活動に従事してきた結果である。

- ②老人の社交のことである。

RCは「老たりクラブ」であり、ロータリアンは「老たりアン」だという。——問題なのは、会員の中にもそのようなことを言うものもいる。

- ③ロータリー運動とは「虚栄心の集りで」であるとか、「金持ちの道楽遊び」だとかいう印象がかなりある。——今までの活動の在り方や広報活動にも問題があろう。

## (7) ロータリアンの類別 ——パストガバナー笹部誠氏（川崎RC）の説

- ①ロータリアン第1種——例会出席は完全で、メイク・アップは必ず行う。他のクラブの会員とも親しく交わり、他クラブの例会を訪問する。定款・細則を完全に知っており、手続要覧の内容も熟知しており、ロータリーの各種機関誌も読み、クラブ活動も率先して行う。
- ②ロータリアン第2種——例会出席は完全であり、他の会員とも親密である。ところがクラブ討論会やクラブ協議会には欠席しがちであり、定款・細則に目を通してはいるが、知っているのはメイク・アップだけ。自分は国際ロータリー会員だからとすましこみ、頼まれればやるが、それ以外は進んでやらない。
- ③ロータリアン第3種——出席も人付き合いも良好であるが、何も知ろうとせず、RCとは例会で飯を食い、話をする場所だと心得る「老たりアン」に多い。

- ④ロータリアン第4種——欠席は平気です。自分の社会的地位をかさに着て、奉仕などを馬鹿にしてやらない
- ⑤ロータリアン第5種——ロータリーは親睦団体だからと言って、ロータリーについて耳を傾けないで、クラブ役員改選の時には自薦につとめる。

### (8) ロータリアンたることの誇り

ロータリアンになって、これだけはロータリアンでなければ味わえない美点に触れておこう。

- ①全世界のロータリアンの絶大な信頼感であり、兄弟愛という感じがする
- ②他クラブの例会訪問がある
- ③地区大会、IM等クラブ外の協議会への出席がある

### (9) まとめ

ロータリアンが常に注意しておかなければならない点

- ①例会に参加するときに、自己の心に一つの目的意識が無ければならない
- ②自己改善の末に、ロータリー哲学の会得
- ③例会出席とリーダーシップ

ロータリー運動を人生の指針を得る原理運動として位置づけ、かつ決議34号の定める如く、原理と実践とを緊張関係において把握し、そのアイデアの開発をRCの例会に見出そうと努力する運動として位置づけるロータリアンには、例会出席にはマンネリなど起こる筈はない。

ロータリアンの付き合いは、人間としての付き合いで、ロータリアンが自分の職業に誇りを持ち、自分の職業を通じて地域社会に奉仕するという基本的態度をとりながらも、本質的にはロータリー運動と言うものが国境を超え、人間を人間として結びつけ助け合うようにするものだということが分かってくる。

ロータリーは職業倫理を説く奉仕団体であり、その根底に人を人として尊重する思想を秘め、あらゆる機会にこれを主張してやまない。

ロータリー運動の指向する彼方に、本当の人類愛に根差した明日へのより良い社会建設の夢が横たわっている。